



今回の紙面

- ◆地域医療最前線 NO. 49 《長沼六一 院長》 ◆看護師さんのページ NO. 29 《小玉千恵 看護部長》
- ◆研修医のページ NO. 32 《小川慎也 先生》
- ◆しまね地域医療支援センターが社団法人化して本格稼働を開始
- ◆しまね地域医療の会



NO. 49

特定医療法人正光会 松ヶ丘病院

院長 長沼 六一

1958年

(S33) 当院は県西端の地、益田に50床の益田精神病院として開設されました。

以来長年の



間その当時の精神病院が皆そうであったように、将に旧態然とした世間という現実とはおよそ縁を切った様な異質の世界の中で精神医療は行われていました。まだ私宅監置のあった自宅へ患者を迎えに行ったこともあります。何しろ時間は充分にありますから(外来患者はほとんど0、月々の入院は4、5人) 毎朝毎朝病棟回診、週1、2回は陳旧性の患者の診療とカルテ記載(保険請求無し)、午後には一緒に畑を耕したり(今では禁じられている、私役なる作業を職員、患者供々に沢山やったものです)、海水浴へ行ったり、近くにあった便所臭い映画館にチャンバラを観に行ったり等々。ある意味、時

の流れの止まった平和空間だったのかもしれません。

60年代後半に入り、世間では反体制運動(大学紛争)が吹き荒れ、精神病院も人権擁護・尊重の観点からその標的とされ朝日新聞一面に「ルポ精神病棟」という衝撃的シリーズが掲載されたりもしました。しかしそれ以前より、私も含め心ある精神科医は「開かれた精神科医療」への当然の必然性と希求は在った訳であり、当院に於いても88年(S63)開設30年を経て、現在の地に松ヶ丘病院と改称、新築移転することでの実現への第一歩を踏み出しました。期しくも同年精神衛生法は精神保健法に改正され、その後精神医療はあれこれの批判を受けつつも脱入院・地域精神医療への展開という、近代化に向かって今日まで地道に進んできたように思います。私自身精神科医になつて半世紀弱、このことは病院と世間の垣根がずい分と緩み解けてきたことで実感しています。今では外来に毎日100名余りの患者さんがきてロビ―は立て込み、4つの診療室で対応しています。私自身がモットーとする患者個々の精神病理を知り、その生き方を尊重し、じっくりゆっくり付き合っていくことがそれなりの成果を上げたのかもしれない。

理事長は脱長期入院に向けての取組にロマンを求めて在宅生活就労支援福祉施設グループホーム設立等々、次々とその構造化の実現を果たしています。一方、院外活動の責は3年前私が病を得たこともあって、全て坪内副院長に丸投げしたところ、彼は本当によくやってくれて、関係諸機関の職員、並びに一般の人々の教育、啓蒙に当たってくれています。この副院長の活動と理事長の理念が重なって、外との対人交流はずい分と増えて、ふと数十年前の隔離された異界は夢だったのかと思うことさえあります(勿論病者へのステイグマが消えたとの楽観は一切私にはありませんが)。我々を支えてくれる看護師、コメディカル等病院職員もずい分充実して、皆意欲をもってやってくれています。

しかし、最後に一番大事で最も述べたいことを一言。地域医療の崩壊は当然当院にも押し寄せており、精神科専門医の不足は深刻です。意を同じくする精鋭に一人でも多く来ていただくことを心より願って止みません。



飯南町立飯南病院

看護部長 小玉 千恵

少子高齢化の進む中山間地域にある飯南町立飯南病院は、人口5,500人の小さな町で唯一入院機能を持つ医療機関です。診療科は8つ、常勤医師5名（歯科医師含む）と非常勤医師の応援を受けながら診療しています。

一般病床48床、常勤看護師は33名で、10対1の看護基準を取得しています。そのうち育児休暇中は4名、育児休暇後の夜勤免除者は4名と、若い世代の子育て支援に取り組む一方、職員のワークライフバランスを意識した勤務が組めるよう努力しています。また、町内唯一の訪問看護ステーションも併設しており、外来・入院、そして在宅へつながる看護を目指して取り組んでいます。

機能分化された都市部の病院と違い、救急医療から、在宅支援や緩和ケア・地域（在宅・施設）での看取りまで、中山間へき地だからこそ、生活や暮らしを支える医療が求められています。「看護」への期待と役割も大きく、スタッフ不足の現状に頭を抱えています。

す。

しかし、昨年は、UターンやIターンの看護師の入職があり、島根県で初となった「半農半X」として農業に従事しながら勤務する看護師や、町の重点施策でもある「森林セラピー」事業に興味を持って定住し、休日には森林セラピーガイドとして活躍している看護師もいます。時代に変化を感じる一年でした。自分のライフスタイルの中で看護師という仕事をする、そんな視野の広さがあるから看護の幅も出るのだと感じています。

また、子どものころから医療に親しんでもらうための取組にも参加しています。



小中学校のふるさと教育の一環として、児童生徒の皆さんに病院紹介や病院で働く多職種の紹介など、小さい頃から興味を持っていただくことで、飯南町におけるこれらの地域医療のあり方について理解が進み、更には将来のスタッフ不足も解

消する？か

もしれませ
ん。そんな
お手伝いの
後にいただ
くお礼の言
葉は、忘れ
かけていた
初心を呼び
起こしてく
れるとともに、「看護師やっていてよか
ったな〜」って、また元気を取り戻し
ます。「飯南町の医療を守り支援する
会」の発足に伴い、住民の方々にも様々
なご支援、ご協力をいただき、心から
感謝しているところです。

小さな町の小さな病院で、頑張っている私たちをそっと応援してください。

研修医のページ

NO. 32

松江市立病院

2年目研修医 小川 慎也

私は昨

年4月より松江市立病院にて初期研修医として勤務し



ています。

当院は松江市の中核病院で田和山と呼ばれる丘陵にあり、隣には古墳時代後期の前方後円墳も存在するおもしろい病院です（その古墳にはおまけに横穴式石室もあります）。

そんな当院では現在、研修医教育をより充実させようという動きが活発になってきています。例えば、従来からあった各科指導医の先生方による講義に加え、最近では教材から得た知識を臨床現場で使えるものに変換するレクチャーや、研修医自ら主催する研修医のためのERカンファレンスなど様々な取組が行われるようになりました。働き始めの頃は試験勉強で得た知識しかなかったため、救急外来などで診察をしてもシマウマ探しをしたり、ひらめき診断を繰り返しているような状態でしたが、上述のレクチャーなどを受けることでより精度の高い診断ができるようになったのではないかと感じております。

しかし、思った以上に医学の道は奥が深く、まだまだ一人前の医師というには程遠い現状で、自分の無力さを毎日痛感する日々を送っています。

さて、当院では今年度、新たに10名の研修医を迎えることとなりました。考えてみると自分が働き始めるにあた

つて先輩
研修医の
存在は大
きかった
ことを今
になって
痛感して
います。
カルテの
使い方か
ら日常業



務に関すること、臨床現場での考え方など非常に多くの事を教えてもらいました。今度は自分達が同様の役割を果たさなければならぬと考えると身が引き締まる思いです。一方で、この機会がより勉強に励む絶好のチャンスだとも感じています。なんとか後輩にも多少は頼られる先輩になるべく、何よりも病める患者さんに頼られる医師になれるよう、日々精進していきたいと考えております。

しまね地域医療支援センターが 社団法人化して本格稼働を開始

島根大学医学部附属病院 病院長
一般社団法人しまね地域医療支援センター 理事長

井川 幹夫

しまね地
域医療支援
センター

(以下、支
援センター

―)は若手
医師のキャ



リア形成の実現を支援することを主要な目的として、平成23年8月に島根県と島根大学医学部に設置され、本年3月には島根大学、医療機関、医師会、市町村、島根県の連携を強化し、支援体制を充実するため一般社団法人化されました。また医学部キャンパス内に7月竣工予定の建物(みらい棟)に事務所が移転し、さらに業務を活性化します。

総合的な診療能力を有する医師を「総合診療医」と称し、その専門医を「総合診療専門医」とする案が出されましたが、島根県においても疾病構造の変化、医師不足及び医師偏在の状況下で、総合診療医及びその専門医の養

成が大きな課題となっています。総合診療医の養成数について、将来的には全医師数の2割程度が望ましいとの見解も示されています。総合診療医には総合的な診療能力に加えて、地域を医療の側面からリードできるマネジメン能力、さらにER型救急医療への対応能力も要求されます。島根大学病院の救命救急センターはER型救急体制をとり、総合診療医育成の場ともなりますが、6月には新センター長が着任する予定で、救急医療および総合診療の研修・指導体制も充実します。また支援センターが提供するキャリアプログラムにおいても救急研修を組み込んだ総合診療医養成プログラムが重要な位置を占めます。一方では、臓器別専門医の養成も継続・強化する必要があります。基本的に臨床研修は優れた診療実績を上げている医療機関で実施されるのが望ましいとされていますので、基幹病院においては専門的医療の提供と診療内容の高度化をさらに推進しなければなりません。

支援センターのサポート対象は、地域枠等卒業医師、奨学金・研修支援資金の貸与を受けた医師のみではなく、島根県に軸足を置いて研修を行う全ての医師ですので、卒後10年以内の医師の方々には是非とも支援センターへの

登録をよろしく願います。また地域枠等卒業医師の方々には、まず県内で初期研修をスタートし、医師の立場で出身地域の医療の現状を把握した後、にキャリアプランを確定していただきたいと存じます。支援センターでは、島根大学病院、県立中央病院等の医療機関を循環して研修を積む卒後10年までのキャリアプログラムを作成しますが、このプログラムは若手医師の皆さんの意向を最大限反映したもので、県外研修あるいは海外留学も支援します。医師のキャリア形成において、卒後早期の期間は将来を決定づける重要な時期ですので、島根県の地域医療に貢献する志を持つ若手医師の皆さん、ぜひ「しまね地域医療支援センター」でのオーダーメイドのキャリアプログラムで医師としての基盤を形成してください。皆さんの参加を待っています。



一般社団法人 しまね地域医療支援センター概要

一般社団法人しまね地域医療支援センターの事務所を4月1日に開所しました。概要をご紹介します。



○法人設立日…平成25年3月21日
○事務所

開所日…平成25年4月1日
所在地…出雲市塩冶町89番地1

島根大学医学部附属病院
外来中央診療棟3階

電話…0853・25・8326

※平成25年夏には、島根大学医学部内に建設中の若手医師の育成拠点
が完成し、事務所を移転します。

○会員…正会員47団体

(島根大学、病院、医師会、
市町村、島根県)

賛助会員1団体(鳥取大学)

○主な事業内容…

- ①医師のキャリア形成支援
- ②医療機関の研修体制の充実支援・
研修機会の提供
- ③医療機関等に関する情報発信
- ④女性医師の離職防止・復職支援

○登録方法…HPから登録

URL : <http://www.allshimane.jp/>



島根大学医学部内に建設される若手医師の育成拠点

(完成予想図：平成25年夏完成予定)

しまね地域医療の会

2月9日(土)に、「平成24年度第2回しまね地域医療の会」を出雲医師会館と隠岐病院をテレビ会議で結び、45名の参加を得て開催しました。この会は、自治医科大学卒業医師や赤ひげバンクを通じて県内に着任された医師等が相互に情報交換、意見交換する場です。

今回は、県の丹藤健康推進課長(厚生労働省より出向、医系技官)のほか、県立中央病院で研修中の後期研修医の先生や、隠岐島前病院で地域医療研修中の初期研修医の先生(沖縄県の病院所属)にもオブザーバーとして参加していただきました。

冒頭、島根県病院事業管理者・島根県参与である中川会長から、県内の医療を取り巻く環境は厳しく、地域医療確保のため自治体病院の使命は以前にも増して重いとのこと挨拶をいただきました。

会議では、医療政策課から地域医療支援センターの法人化等について



て説明をした後、各地域の第一線で活躍する医師から現状報告等がなされ、積極的な意見交換が行われました。その



中で、医療従事者確保に効果的な情報発信、医療と介護の連携や、ITを活用した医療機関間の情報共有の重要性などについてのご発言があったほか、県の地域医療再生計画についてのご意見をいただきました。また、顧問である邑智病院の石原院長は「震災復興のため逼迫する国の財政を側面的に支援するためにも、地域や病院の自立が大事であり、現在の医療を堅持しつつ医師の過重労働にならない方法で健全な病院経営をしていきたい」との思いを述べられました。

この会の後は、場所を移して懇親会を行い、より親密な情報交換を行うとともに、会員相互の親交を深めました。

【医療政策課 神村】

島根県で勤務していただける方を紹介してください

友人・知人に島根県での勤務を希望される医師がおられましたら、是非ご紹介ください。ご紹介いただいた先生には、医療機関の情報等を提供し、U・Iターンを支援します。

医師募集・地域医療視察ツアー参加者募集

島根県は県内で勤務いただける医師を求めています。全国どこへでも専任の医師が出張し、具体的な相談に応じます。また、地域医療の視察ツアー(県負担)を実施しています。お気軽にお問い合わせください。

「赤ひげバンク」の登録者のみなさんへ

住所等に変更があった場合は、メールでお知らせ願います。

携帯からの問い合わせはこちら

〒690-8501 松江市殿町1番地 島根県健康福祉部 医療政策課 医師確保対策室

TEL 0852-22-6684 FAX 0852-22-6040

E-Mail iryu@pref.shimane.lg.jp

ホームページ : [島根の医師確保対策](#)

検索

